



過去から学ぶ

防災 マップ

過去を見て、知って、
未来の防災について考えよう!!



天白区の
マスコットキャラクター
「かぼっち」

発行：天白区区政部総務課

協力：天白図書館

発行年月：平成29年3月

みなさんは、「天白」という名称は、「天白川」から取られたということをご存知ですか？

天白区の象徴の一つとも言える「天白川」ですが、実は昔、天白区の様々な地区で「天白川」による大洪水や大氾濫に悩まされた歴史がありました。

地名の由来には、それぞれの歴史が秘められており、また、それを教えてください。



本マップは、

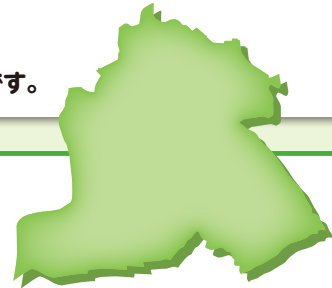
防災を身近に感じ、そして、関心を持っていただくため、みなさんに親しみやすい天白区の地形的特徴を

●土地の成り立ち

●小字名の由来

の視点から、わかりやすくまとめたものです。

現代、そして未来の防災について考えるきっかけとしていただけると幸いです。



天白区の土地の成り立ち

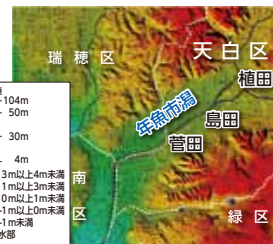
① 土地の様子

天白川流域は、尾張丘陵の谷間にあたり、およそ七千年前には、伊勢湾の海水が奥深くまで入り込んだ「年魚市潟（あゆちがた）」と呼ばれる入江でした。（図1）

年魚市潟の海底には起伏があったため、海面の下降や土砂の堆積により、次第に陸地化され、隆起したところが島々となりました。江戸時代には島の周りに堤防を築いて高いところを居住地とし、低いところで稲作が行われていました。「島田」という地名は、農民があたかも島に通うがごとく船に乗って水田に通ったことから、この名がついたと言われています。

天白川流域には、「島田」のほかにも「植田」や「菅田」という地名があり、稲作の盛んな地域だったことがわかります。

ちなみに、「植田」は年魚市潟の上方にあったことから「上田」が転じたことされ、「菅田」は菅（スゲ）と呼ばれる湿地帯に生息する草類が生息していたことから由来したと言われています。



（図1）デジタル標高地形図に加筆（国土地理院）

② 度重なる洪水

一方、天白川には堤防らしい堤防がなく、村々では毎年のように洪水に悩まされていました。

植田村では天白川と植田川の合流する場所に集落の中心があり、明和4年（1767年）に発生した大洪水で、家が流され田畑まで失う被害が発生しました。この洪水を契機として、村全体が山麓・山腹へと大移動をしたとされています。榮久寺、泉稱寺、全久寺も以前は植田村の街道沿いにありましたが、度重なる洪水により山麓へ移転しています。

さらに、近年発生した水害を見ると、平成12年の東海豪雨でも同地域が浸水しており、浸水しやすい地域であることがうかがえます。



浸水被害への
対策と実績は
6・7ページを
見てね

③ 丘陵地の液状化

丘陵地の谷間に位置する場所は水の通り道となることから、流れてくる土砂が堆積し、平野が形成されていったと考えられます。こうした地形は「谷底平野」と呼ばれ、地盤が軟弱で液状化の可能性が高くなる傾向があります。

④ これからの災害に向けて

このように宅地化される以前の地形や地名の由来を知ることで、どのような災害リスクが潜在しているかをイメージすることにつながります。

もっと知りたいときは

天白区役所3階の防災・減災コーナーで自由に「減災まちづくり情報システム 試作版」を操作して自宅周辺の過去の地形図を調べることができるよ！
防災関係の書籍や防災関係グッズの閲覧もできて便利だよ！



旧地名付き

天白区 標高データマップ



大字八事

主な学区 大坪、八事東、表山

久根上【くねあげ】

この地は湿地帯で、鍬で土をくねあげて耕作をしたところ。

池之内

明治・大正年間に名古屋市随一の八事遊園地にあった上池・下池のその下にあって湿地帯であったところ。昔はこも池であった。

西 浦

年魚市潟の入江につけられた名称で、八事村の西にあたる。大字植田にも西浦がある。

川之内

昔は天白川が北の方を流れていたため、そのころ川の中であった土地。

中砂入

天白川の氾濫原。ここから「中根」にかけてこうした砂入地が多い。

鶴田

年魚市潟のころ、鶴が多く飛んできたところ。

大字島田

主な学区 天白、山根、しまだ、高坂

溝 口

天白川の支流、大根川から用水路がとってあるから溝の口とつけた。古老の話によると大根(おおね)とは負いね子ということばから転化。小牧長久手合戦の折、徳川家康が川の増水で困ったとき、背負って川越えをさせたところからでたことば。

東寄鷺・西寄鷺【きりょう】

天白川と植田川の合流点で、湿地帯であった。鷺が多く集まったところの意。

池 場

年魚市潟の退化と共に海跡湖ができた。その池のあるところの意。

菅 田【すげた】

島田村の支村。菅が茂っていた土地。

坂海戸【さかかいと】

昔の年魚市潟を物語る地名。坂を下って海への出口。

大字野並

主な学区 相生、野並

稲 田【いなだ】

いなだはいただきからの転化で、山の頂上の意。

欠ノ上【かけのうえ】

洪水で天白川が削りとったその上の土地という意。

福 池【ふくいけ】

池の名からとった土地の名。

砂 間【すなま】

天白川の氾濫のため、砂のたまったところ。

塩辛田【しおからでん】

昔、年魚市潟の中、海水がさしこんでいて、田圃になっても塩分を含んでいるとの意。

古 川

天白川の一番もとの古い流水路と、現在の天白川の合流する土地につけた名前。

高 下【こうげ】

自然堤防の微地形。高いところもあり低いところもある土地。



史跡と災害について



えいきゅうじ 榮久寺

創建は不詳。文化3年(1806)、天白川の堤防決壊による水難を恐れて現在の地に移転した。明治24年(1891)、濃尾大震災で本堂などが大破し、再建した。

せんしゅうじ 泉稱寺

創建は不詳。この寺は、はじめは八幡社の前にあったが、天白川の洪水を恐れ、享保19年(1734)に現地に移転した。

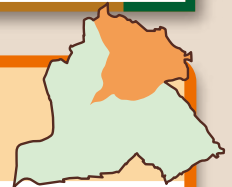
ぜんきゅうじ 全久寺

文明3年(1471)、植田城の初代城主・横地秀綱が建立。寛政4年(1792)、天白川の度重なる洪水のため、植田村が山麓に大移動した際、この寺も現在の地に移った。昭和49年に鉄筋コンクリートの寺院に改築された。

大字植田

主な学区

植田、植田南、植田北、植田東、大坪



株 田

天白川に沿っている。天白川の堤防を守るための増水時の切れ込み貯水田になっていた土地。往時は年魚市湍の雑木林であり、そこを開墾して新田づくりをしたため、ところどころ切り株が残っていた。

東屋下・西屋下

その昔、植田村は駿河街道筋に沿ってつくられた街村が中心であったが、天白川の大洪水で山麓・山腹に大移動した。屋下とはその南方の意で、それを東西にわけたもの。

蛇 崩 【じゃくずれ】

蛇が多く住んでいて、土砂をとるため崖を崩すと蛇が群がって落ちてくるといふ意。

三郎廻間 【さぶろはざま】

廻間とは谷間の意。谷間は山から自然湧水のあるところであるため、稲作によい土地。三郎とは人名であるが、土地の開拓者の名前か土地の所有者名。

井 口 【いぐち】

天白川の右岸に沿ったところで、天白川に堰をつくり、堤防下をくりぬいて、灌漑用水路を通した井の口である。この井のあたりにつけた名称。

堤 溝 【つつみみぞ】

堤防に沿って灌漑用水路があったところ。この地が堤防から離れているのは天白川の流路変遷のためである。現在は流路が南側になっている。

長 原

天白川の氾濫原で、川に沿ったところ。

欠 下 【かけした】

天白川の大洪水で一部潰したところ。

丸 田

植田川に沿った湿地地帯。草生えの中に丸い田圃があった。

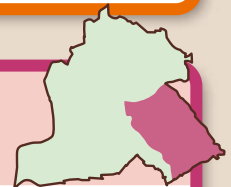
大久手

久手(くて)とは湿地帯のこと。植田川に沿って、南に焼山があり、排水の悪い土地であった。

大字平針

主な学区

平針南、平針、平針北、原



大 藪 【おおやぶ】

天白川の決壊を防ぐための竹藪があったところ。

高瀬木

天白川の支流・半森川の洪水を防ぐため、高いせぎがあった。

欠 下

植田村にもあったように、洪水で削りとられた土地。

奴女里川 【ぬめりがわ】

湿地帯でぬめぬめしていた土地。

小 田 【おだ】

「御田」が小田に転化。駿河街道の北方の田の中に「経塚」があって盛土の上に老松が生えていた。

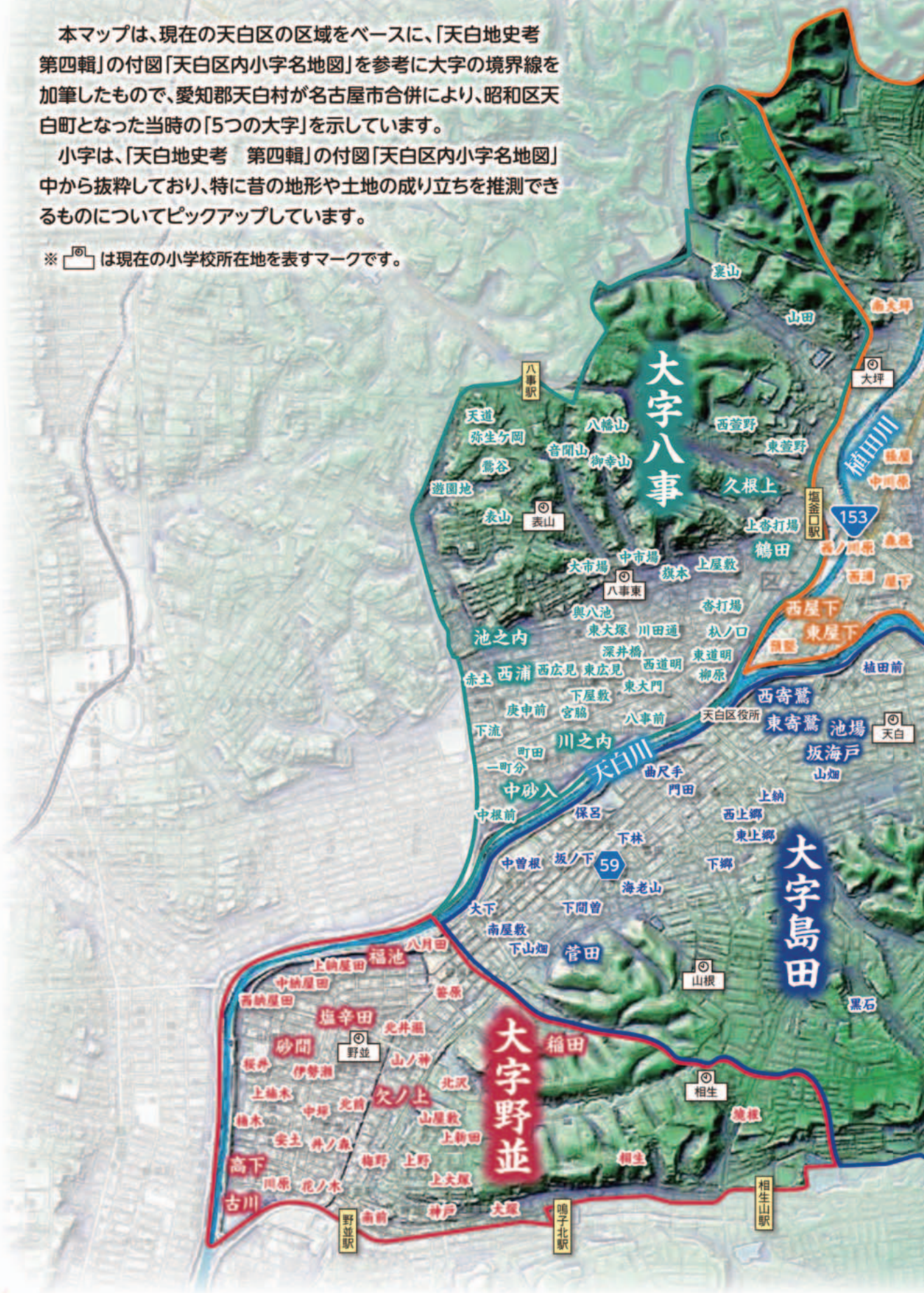
川 田 【かわだ】

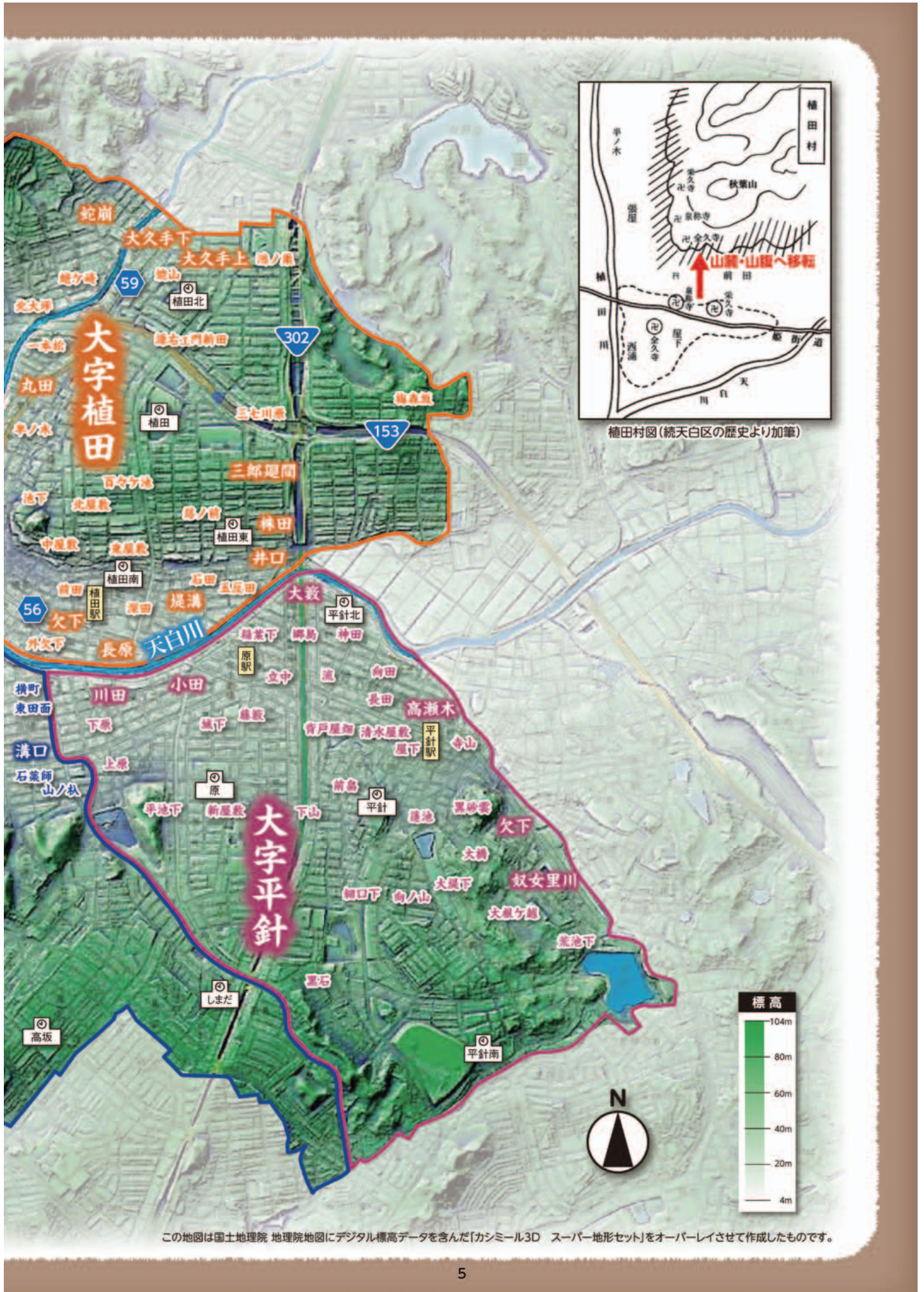
昔、天白川は洪水のたびごとに流路を変えた。ここは前は川の中であったとの意。

本マップは、現在の天白区の区域をベースに、「天白地史考 第四輯」の付図「天白区内小字名地図」を参考に大字の境界線を加筆したもので、愛知郡天白村が名古屋市合併により、昭和区天白町となった当時の「5つの大字」を示しています。

小字は、「天白地史考 第四輯」の付図「天白区内小字名地図」中から抜粋しており、特に昔の地形や土地の成り立ちを推測できるものについてピックアップしています。

※  は現在の小学校所在地を表すマークです。





東海豪雨を受けての対策について

1 はじめに

平成12年9月11日から12日にかけて襲った東海豪雨は、総雨量(植田川観測所)が556mmに達し、年間総雨量の約1/3に及びました。この未曾有の豪雨により天白川の水位は計画高水位を越え堤防天端高に達するほど上昇し、天白川に流入する支川では堤防越水(外水氾濫)が発生しました。また、この豪雨では名古屋市市の雨水排水ポンプの排水能力を超過しており、内水氾濫も発生したため、天白区内各所に甚大な浸水被害をもたらしました。今後このような事態とならないよう東海豪雨と同規模の降雨が発生した場合においても、浸水被害を最小限にするための対策として、

①愛知県による天白川の河川激甚災害対策特別緊急事業(以下、「激特事業」という。)

②名古屋市による緊急雨水整備事業

を実施しました。

東海豪雨の被害	主な対策
外水氾濫	天白川の激特事業(愛知県) ●天白川河川整備(河道拡幅、堤防強化、河床掘削等) 支川の整備(名古屋市) ●藤川、郷下川の整備(堤防嵩上げ等)
内水氾濫	緊急雨水整備事業(名古屋市) ●雨水排水ポンプの増強(河川への排水量をUP) ●雨水貯留施設の設置および管きょ増強



外水氾濫：大雨によって河川の水位が高くなり、堤防を越えて水があふれたり、堤防が決壊することにより浸水する現象のことです。

内水氾濫：雨の量が下水道などの排水施設の能力を超えるときや河川の水位が高くなったときに、雨水を排水できなくなるによりマンホールや側溝等から雨水があふれて浸水する現象のことです。

雨水貯留施設：雨水を流す雨水管などの排水能力を超える雨水を一時的に貯めることで、雨水が道路上にあふれることを防止し、浸水被害を軽減するための施設です。排水先となる排水施設の水位が低下したら徐々に排水します。公園の下などに設置する「箱型」や、道路下に設置する「トンネル型」があります。

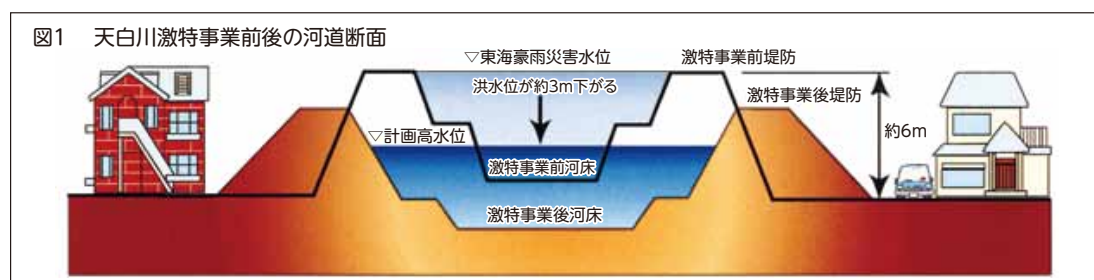
管きょ：地面に埋まっている排水管や、排水用の側溝のことです。

天白区管内の雨水対策(上記②)については、東海豪雨前までは1時間50ミリの降雨に対応する施設整備を進めていましたが、東海豪雨による水害を受けたことから激特事業(上記①)の河川改修事業と同時期に実施することにより、著しい浸水被害が集中した地域を対象に原則1時間60ミリの降雨に対応する施設整備を行い、対策整備は完了しました。

この施設整備を行った地域においては、名古屋地方気象台における過去最大の1時間降雨量97ミリの降雨(東海豪雨時の記録)に対しても床上浸水を概ね防ぐことができるようになりました。

2 激特事業(河川激甚災害対策特別緊急事業)とは

東海豪雨同等の降雨が再度発生しても洪水を安全に流下させ、内水被害を最小限とするために、天白川の千鳥橋(南区)上流(河口から約0.9km)付近から、野中橋(瑞穂区)(河口から約8.5km)付近までの区間において、河道拡幅、河床掘削等を平成12年度から平成17年度にかけて実施した浸水対策事業です(図1)。なお、現在は、その上流である野中橋(瑞穂区)付近から植田川合流点(天白区)の区間において、河道の整備を進めています。



東海豪雨を受けての対策について

3 緊急雨水整備事業とは

激特事業に併せて、雨水排水ポンプの増強、雨水貯留施設の設置などを実施した浸水対策事業です。

(1) 雨水排水ポンプの増強(河川への排水量をUP)

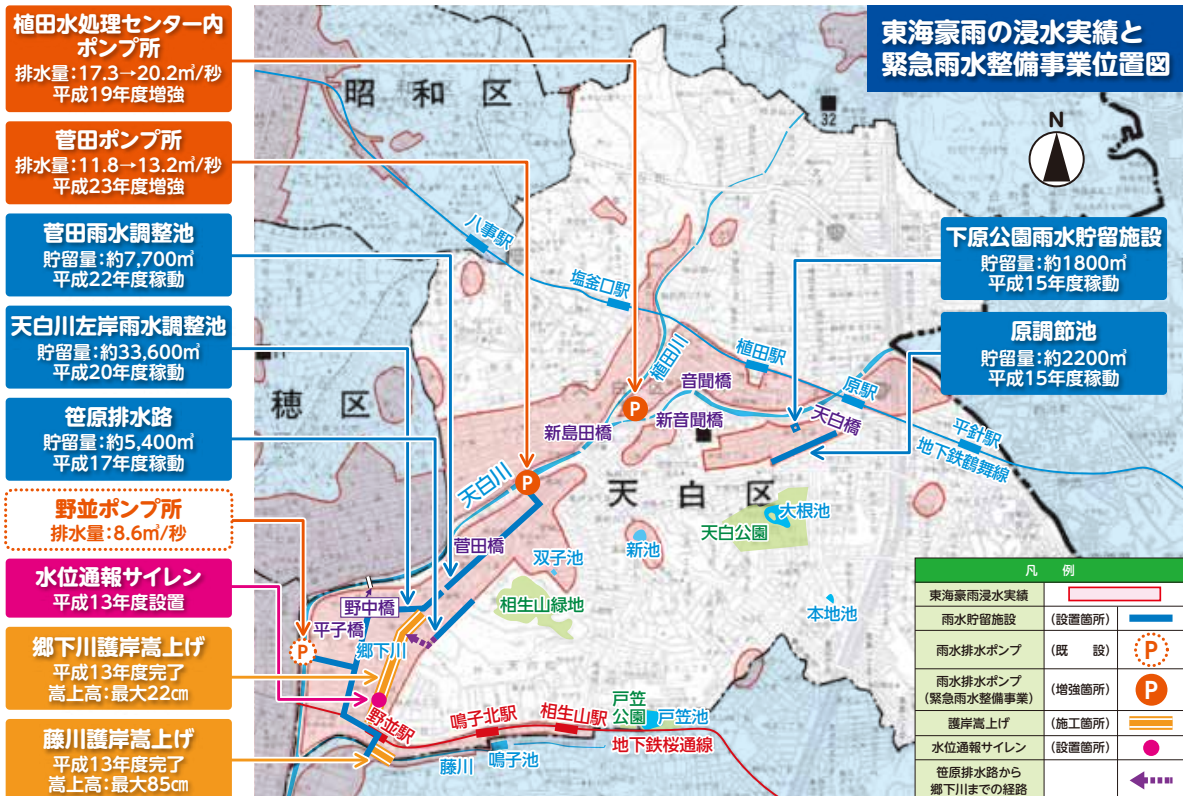
名称	排水量(m³/秒)		備考
	東海豪雨以前	東海豪雨以後	
植田水処理センター内ポンプ所	17.3	20.2	昭和57年度稼働 平成19年度増強
菅田ポンプ所	11.8	13.2	昭和58年度稼働 平成23年度増強

(2) 雨水貯留施設の設置(5箇所新設)

名称	貯留量(m³)		備考
	東海豪雨以前	東海豪雨以後	
下原公園雨水貯留施設	—	1,800	平成15年度稼働
原調節池	—	2,200	平成15年度稼働
笹原排水路	—	5,400	平成17年度稼働
天白川左岸雨水調整池	—	33,600	平成20年度稼働
菅田雨水調整池	—	7,700	平成22年度稼働

(3) その他

- 藤川、郷下川の越水を防ぐために護岸を嵩上げ(東海豪雨時の水位に対応)
- 水位通報サイレンを設置
- 野並ポンプ所について、東海豪雨時の浸水レベルに対応した、燃料供給ポンプ位置の嵩上げ及びポンプ室の開口の閉塞



参考文献: 浅井金松著 1977年 『天白地史考 地域の地歴研究』 東海女子高等学校、浅井金松著 1980年 『天白地史考 第四輯』、浅井金松著 1983年 『天白区の歴史』 愛知県郷土資料刊行会、浅井金松著 1987年 『続天白区の歴史』 愛知県郷土資料刊行会、株式会社 角川書店編 1992年 『なごやの町名』 名古屋市計画局、隅田庄太郎編 1956年 『天白村誌』 天白村誌刊行会、名古屋市消防局総務部職員課編 2015年 『東海豪雨6月号』 名古屋市消防局望楼会

参考資料: 愛知県HP、名古屋HP、天白土木事務所資料、天白サービスステーション資料